有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、鄧南光撮影の「東京の女性たち」（1930年代）

翻訳家天野健太郎

天野健太郎の御蔭で、台湾のすばらしい本が何冊も読めた。二〇一八年、彼は膵臓癌で突然亡くなった。一九七一年生まれだから、まだ四十七歳だった。京都府立大から、蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）の映画に影響を受け、台湾師範大学、北京語言大学に留学。帰国後、短期間で一七冊もの台湾書籍を翻訳した。俳人で、そちらの著作もあった。

彼の代表的翻訳には、龍應台（りゅうおうたい）の『台湾海峡一九四九』、『父を見送る』（いずれも白水社）や呉明益（ごめいえき）の『歩道橋の魔術師』（河出文庫）、『自転車泥棒』（文春文庫）などがある。

龍應台はエッセイストで元台湾文化部長（部長は日本の大臣に相当）。彼女は筆者と生まれが十日ちがうだけの七十四歳である。

呉明益は天野健太郎と生まれがひと月ちがうだけ。

最近、世の中は、「個人情報の保護」と、険のある目つきですぐ閉じ込もってしまう。筆者はヒトを理解したいのである。そのために、そのヒトがいつ生まれ、どこで生きてきたかを知ることは基本である。

陳柔縉（ちんじゅうしん）の著作

さて、天野さんは陳柔縉のコラム集、『日本統治時代の台湾』（PHP）も訳している。内容は題名通り。かつての台湾と日本の事情が、エピソード的に知れる好著である。残念ながら、彼は五年前、バイクの追突事故で亡くなった。一九六四年生まれ、まだ五十七歳だった。

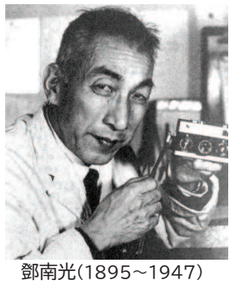
その陳柔縉の遺作が『高雄港の娘』（春秋社二〇二四）。訳は田中美帆、夫が台湾人で天野健太郎より二歳若く、同じく台湾師範大学で、台湾史を研究した。

実在の郭孫雪娥（かくそんせつが）をモデルにした孫愛雪（そんあいせつ）の一九三〇年までの日代から二〇二〇年までの日台を跨ぐ女一代記である。

愛雪は両親ともに教師で、小学校、高等女学校に学び、三井物産高雄支店に就職する。日本の敗戦、引き揚げ後、国民党の独裁下で、父は香港に逃亡。東京で衣料品販売を皮切りにレストラン、クリーニング店などの事業を展開する。夫は台湾独立運動に奔走、彼女は資金面で支え、製薬会社の経営も引き受けてしまう。

台湾は、選挙の投票率が毎回七割を越す。原発の再稼働や同性婚など、一人一人の参加による住民投票で決めようとする。蔡英文が総統を二期務めた直近の台湾は、二十世紀の歴史小説、回顧録、伝記の出版がつづいている。過去の検証と民主的社会はセットである。正逆の日本が底抜けの衰退をつづけるのは当然だろう。

朱和之（しゅわし）『南光（なんこう）』（春秋社二〇二四）


鄧南光（1895～1947）

鄧南光は新竹（シンジュー）の近郊、北埔（ペイプー）の出身。北埔には、鄧家別邸が鄧南光映像紀念館として一般公開されている。

三万人近く（推定）が犠牲となった白色テロから三十八年間、世界最長の戒厳令下で、日本統治時代の南光らの写真は、危険物として埋もれてしまった。朱和之は、その南光の写真家としての生涯を小説家した。

南光の写真に対する考え方、撮影、現像、焼きつけの緻密な描写は、朱和之の創作である。彼は作品化に当たり、これまでの知識に加え、写真技術の勉強をやり直した。ライカなど昔のカメラの構造や機能の細かい説明にも圧倒される。

鄧家は、南光を中学時代から東京に留学させた。法政大学に入り、カメラ部に所属する。

小説に一貫するのは、あくまでも南光の写真家としての生き方である。台湾の百年の政治状況への抵抗を仮託しない。会話と地の文や時間軸を錯綜させる特徴ある文体は、しかし、あくまで軽やかで風通しがよい。

朱和之の物語り方は、新鮮で清潔である。訳者は、中村加代子。陳柔縉『台湾博覧会1935』も訳している。

陳澄波「私の家庭」（1931年）

柯宗明（かそうめい）『陳澄波（ちんとうは）を探して』（岩波二〇二四）

日本は、台湾人にも入学できる学校として、総督府国語学校（のち台北師範）を作った。一九一〇年、静岡出身で欧州帰りの石川欽一郎が、美術教師として赴任。彼の影響は絶大で、東京美術学校（現東京芸大）に多くの台湾人学生が留学した。

陳澄波（一八九五～一九四七）もその一人で、一九一九年設立の帝国美術院展覧会（帝展）で二回入選する。

台湾に戻り、当時の高等学校の教師になろうとするが、「二等国民」は採用されなかった。

陳澄波「西薈芳」（1932年）

上海新華芸術専科学校から声がかかる。西洋画科の主任となり、中国を代表する画家十二人に選ばれる。妻と三人の子供を嘉義から呼び寄せ、家族で暮らせた時期である。

日本の敗戦後、どの国を祖国とするかで、彼はあくまでも孫文の三民主義を信じ、国民党を支持する。嘉義の議員にも選ばれ、国民政府歓迎準備委員会に加入。副議長として、政府支持の演説までしてしまう。

国民党の暴力、弾圧に人々の不満が高まる。嘉義では、学生と南京からの派遣部隊との銃撃戦も起きる。陳澄波は命がけで軍に平和解決を求めるが、拘留され、嘉義駅前で公開銃殺された。

彼の作品は世の中から長く消えてしまう。小説は、作者不明の絵の修復を依頼された若い売れない画家（阿政）と新聞記者の恋人、方燕を狂言回しとして進む。絵の謎を解明しようと、実在の多くの人々に話しを聞いて回る。一種推理小説のようで、かつ一九八四年のまだ「危ない」時代設定ゆえのサスペンス小説の味わいもある。陳澄波の作品は、香港のサザビーズなどのオークションで、今や十億円ぐらいで落札されている。

陳澄波は、国籍が清、日本、中華民国と変わり、挙句の果て、政治的に殺された。この百年の歴史を台湾の人々は内在化し、それをもとに台湾の社会の行く末を考えているのである。

栖来（すみき）ひかり

『陳澄波を探して』の訳者である。一九七六年、山口県出身。台湾に二〇〇六年より在住。台湾人と結婚、文筆家として、最近よく目にする人である。昨年公開された記録映画『湯徳章（トウンテッチョン）』の監修協力にも名が見える。湯（トウン）は父が日本人、母が原住民、四十歳で国民党軍に台南市で公開処刑された。

栖来さんは、『世界』二月号で、白色テロの時代を描いた『大濛（ダーモン）』の台湾での大ヒットの様子も伝えている。監督は『熱帯魚』、『祝宴！シェフ』、『一秒先の彼女』などの陳玉勲（チェンユーシュン）である。